

# 話者自身の経験に対して使われた〈けむ〉について

宮 武 利 江

## はじめに

小論では、物語作品に比べて書き手のより直接的な心情表現があらわれやすいと思われる平安時代の女流日記作品を中心に、話者自身の経験について用いられた〈けむ〉の用例を検討し、それらが特別な用法ではなく、〈けむ〉の中心的な用法、つまり過去の事柄の推量、という用法から外れるものではない、ということを示してみたい。このような助動詞の意味を考える場合には、事実認識のレベルと、表現の選択のレベルを混同しないように注意して結論を出すべきだというのが、小論の立場である。同時に、自分の経験したはずの事柄に対して〈けむ〉を用いる話者の「表現態度」に着目すると、それを確かなこととして認めたくない、事実とは信じられない、という心情がうかがえる場合がある、ということも指摘したい。

## 一、〈けむ〉の一般的な用法

先行研究では、助動詞〈けむ〉の意味を、〈へらむ〉と一括して、

疑いの気持ちを含む主観的な推量と捉えているのが一般的だと思われる。〈けむ〉も〈へらむ〉も、事実そのものの存在が不確かであるための推量と、確実な事実の原因・理由等の推量、そして主に連体形に見られる、伝聞・婉曲、という三つの用法に分類されることが多い。しかし、このような分類は解釈の便宜上のものに過ぎず、基本的には、「確かなこと」として言明できないある事柄についての、推量にもとづく表現」とまとめて捉えてよいだろう。〈けむ〉については、〈へらむ〉に付随するかたちで論じられることがほとんどで、問題点も〈へらむ〉との比較における部分で指摘される以外は、右に述べた意味解釈に対して根本的な異論は出されていない。

〈けむ〉と〈へらむ〉の違いは、現在起こっている事柄に〈へらむ〉を、過去に端を発する事柄に〈けむ〉を用いる、と整理されているが、この点では〈けむ〉と〈へらむ〉のいわゆる「混同」や、〈けむ〉のあらわす事柄の継続性が指摘されることがある。しかし、〈けむ〉が使われている場合は、現在時から見て以前に起こったと捉えられるような事柄の表現であり、たとえその結果と

して現在の事実があつたとしても、それと〈けむ〉で表現されている事が現在も存続しているということとは別である。また、〈へらむ〉が〈けむ〉に置き換えられそうに見える、として挙げられるような例は、〈へらむ〉の前に完了の助動詞「ぬ」や「つ」がある場合がほとんどで、「〜であつただろう」と全く同じではなく、やはり完了の意味をもった「〜でしまつていようだろう」などのように解すべきではないかと思える。そして、異同が見られることがすなわち「混同」ではなく、書き写した人がどちらかがふさわしいと考えたからこそ〈けむ〉で書かれ、あるいは〈へらむ〉で書かれたのだろう。いずれにしても、現在と過去をどこで区切るのがほんとうか、などという客観的な基準が存在するわけでもなく、あくまでも言語を介しての発話主体の物事の捉え方が提示されているのだから、〈けむ〉と〈へらむ〉のどちららを選ぶかという表現者の態度こそが問題にされるべきであらう。また、選ぶだけの理由がそこにあると考えるべきであらう。

## 二、話者自身の経験に対して使われた〈けむ〉

前章で、〈けむ〉の基本的な意味を、「過去の不確実な事柄に対する推量」をあらわす、とまとめた。ところが、このような〈けむ〉が、話者自身が経験したことを述べるために用いられる場合が確かに存在しており、自己の経験であるのに推量表現がとられるという矛盾が、先行研究において特別に言及さ

れる対象となってきた。書き手がたしかによく知っているはずのことを推量で表現しているとしたか見えないような、論理的な説明が難しいケースには、婉曲・あるいは詠嘆という解釈が与えられたりしている。

小論で取り上げようとするのも、このような〈けむ〉の用法についてである。婉曲とか詠嘆といった用語は実際に意味するところが捉えにくい、概念の不明確な言葉であり、これらのレッテルを貼つても完全な説明がなされたことにはならない。より説得力のある解釈を提示するために、以下の章で用例に再検討を加えることとする。

話者自身について〈けむ〉が使われる例を、まず、次の三つのタイプに分けてみる。(用例として取り上げるものの中には、一般に伝聞・婉曲と解されている連体形の〈けむ〉でも、自分が直接見聞きしたり思ったりした事柄についての表現であれば、含めることにした。)

I 自分のことだが、人から見てどうだっただろうか、こんなふうに関心されたらどうか、と想像する場合。

II 自分の行動や、直接見聞きしたことだが、「どうして〜したのだろうか」「どういふわけだったのだろうか」など、疑問語をともなつて、その原因などを推量する場合。

III 自分の経験、過去のある時点での心情などを、疑問語なしに〈けむ〉を用いて述べている場合。

これは単純に言葉の上に表面的にあらわれている事象から分類したものだが、このうちIとIIのタイプは、推量表現が用い

られてもおかしくない場合ということになり、IIIのタイプについては少々検討を要することになる。

## 二の二 タイプI

a 宰相の君の顔がはりし給へるさまなどこそ、いとめづらかに侍りしか。まして、いかなりけむ。されど、そのきはに見し人の有様の、かたみにおぼえざりしなむ、かしこかりし。〔紫式部日記・御いただきの御髪…〕

紫式部の仕える中宮彰子のお産が無事に済んだ後、それまで必死で安産を願ひ、心配の限りを尽くした女房たちが、ほっと一息ついてお互いの顔を見合った時のことを回想している箇所である。みんな涙でお化粧もくずれ髪もふり乱してすつかり人相が変わってしまった。そして紫式部自身もどんなにひどい格好だったかしら、と述べる所で「けむ」が使われている。

b 局に、物語の本どもとりにやりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やをらおはしまして、あさらせ給ひて、みな内侍の督の殿に奉り給ひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞとり侍りけむかし。〔同上・いらせ給ふべきことも…〕

c 「あることあらがふ、いとわびしうこそありけれ。ほとほと笑みぬべかりしに、左の中将の、いとつれなく知らず顔にてる給へりしを、かの君に見だにあはせば、わらひぬべかりしに、わびて、台盤の上に、布のありしをとりて、ただ食ひに食ひまぎらはししかば、中間にあやしの食ひものやと、人々見けむかし。」〔枕草子・里にまかでたるに〕

これは清少納言が里下がりしていたとき、彼女と昵懇の間柄である男性が、ほかの男から彼女の居所を言えと責められてごまかすのに苦労したという話。笑いをこらえるためにワカメをむしやむしや食べていたので、食事時でもないのにおかしなことと人は見ただろう、という表現である。

d あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかに見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、とどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまざれど、わが思ふままにそらでいかでおぼえ語らむ、…〔更級日記・冒頭〕

d は自分自身を対象化して述べているもので、a・cとは異なっている。この例は、自分の経験に「けむ」が使われた例として取り上げられやすいが、あくまでも「…生ひ出でたる人」という表現をとっている以上、作者の述べ方は「私」という限定では行われていないのである。

## 二の二 タイプII

e …あるじのおほい殿「あはれ、さきさまの行幸を、などて面目ありと思ひたまへけむ。かかりけることも侍りけるものを」と、酔ひ泣きし給ふ。〔紫御前の御遊びはじまりて〕

自分の娘が皇子を出産した後に、自分の邸に天皇を迎えての道長のことば。今回に比べたら、今までの行幸を名譽なことだ

なんて、どうして思ったりしていたのだろう、と、自分の過去の気持ちに対する疑問として使われ、また、この時の感激の大きさを表すことにもなっている。

f あはれ、今様は、女も数珠ひきさげ、経ひきさげぬなし、

と聞きし時、あな、まさり顔な、さる者ぞやもめにはなるてふなど、もどきし心はいづちかゆきけむ。(蜻蛉日記・中) g かうて、つれづれとながむるに、などか物語でもせざりけむ。(更級)

h 御帳の東なる御座のきはに、御几帳を奥の御障子より廂の柱までひまもあらせず立てきりて、南面に御前の物はまるりすゑたり。西によりて、大宮の御膳、例の沈の折敷、何くれの台なりけむかし、そなたのことは見ず。(紫・御五十日は、霜月のついたちの日)

これは「見なかつたのでよくわからない」ということで、「なんとかの台だったでしょう」という表現になっている。

## 二の三 タイプ III

このように、タイプ I や II は自分に直接関わる事柄であつても、自分では確かめられなかつたことの言明であり、〈けむ〉が使われることに何ら疑問はない。客観的に見て話者にとっては確かな事実だと考えられるのに、なぜか推量の〈けむ〉が使われている、ということの問題となるのは、結局 III のタイプに限られることになる。このとき、何が〈けむ〉で表現されている「不確かさ」の対象なのか、という点に着目しながら、用例を見て行くことにする。

i ぬまじりといふ所もすがと過ぎて、いみじくわづらひ出でて、遠江にかかる。小夜の中山など越えけむほどおぼえず、いみじく苦しければ、天ちうといふ川のつらに、飯屋造り設けたりければ、そこにて日ごろ過ぐるほどにぞ、やうやうおこたる。(更級)

j ありし世の事、思ひ出づれど、「住みけむ所、誰と言ひし人」とだに、たしかに、はかばかしうも、おぼえず。ただ、「われは限りなり、とて、身を投げし人ぞかし。いづくに、来たるにか」と、せめて、思ひ出づれば、(源氏物語・手習)

j は、浮舟という女主人公が、絶望のあまりさまよい出て、瀕死のところを救われ、しばらく生きるか死ぬかの状態を続けたあとでやっと意識を取り戻したときの、彼女の心中描写。「住みし所」となっていないのは、「婉曲」表現ではなく、この時の彼女のいかにもぼんやりした頭の状態をより積極的に示すためではないだろうか。

i や j などの例は、話者自身のことであつても、病気などでぼんやりしていた時や精神が動揺している時だったり、また記憶がさだかでなかつたりして、事実関係がはっきりしていない場合である。係助詞「や・か」が用いられて、その疑念が示されることもあり、断定的に表現「できない」ので〈けむ〉が使われた、と考えられる。これを仮に A タイプとする。それに対して、次の k のような例は B タイプとして、一応分けて扱いたい。

k 思みのところになむ、夜ごとに、と告ぐる人あれば、心やすらかであり経るに、月日はさながら、鬼やらひ来ぬるとあれば、あさまし、あさましと思ひ果るもいみじきに、

人は、童、大人ともいはず、「儼やらふ儼やらふ」と騒ぎのしるを、われのみのどかにて見聞けば、ことしも、ここちよげならむところのかぎりせまほしげなるわざにぞ見えける。「雪なむいみじう降る」といふなり。年のをはりには、何事につけても、思ひ残さざりけむかし。(蜻蛉・中)

根来司氏は、このkの用例のような「けむ」を「けり」の婉曲的用法」と位置付けている。(「けむ」と「けり」の関係)『月刊文法』二一八、昭和四五年六月)。話し手自身がよく知っている事でも、「悲嘆ないし感嘆のあまりそのことをたしかに領解したようにいわないで、「けむ」を用いてわざと「ようだ」というふうに想像的に推量的に表現している」という解釈である。「自分自身の過去のことも非現実のこのようにいい方」という指摘に異議はないが、「悲嘆・感嘆」と「想像・推量」とがただちには結びつかない。また、「感嘆のあまり」という説明では、このとき用いられるという「婉曲」の「けむ」と、いわゆる「詠嘆」を表す「けり」との違いがわかりにくい。そしてさらに、感情が高まるとかえて計算的に表現を選ぶ、というのは少々おかしな話で、もつとはじめから意図的なものではないだろうか。kの「けむ」のあらわす「不確かさ」は、根本はAタイプと同じもの、ただそれは、言ってみれば「装われた不確実」であり、背後にあるのが、断定「したくない」、事実として「認めたくない」、という話者の心情だと考えたらどうだろう。蜻蛉日記にはこの種の、Bタイプと考えたい「けむ」がかなり多い。蜻蛉日記の冒頭に、「過ぎにし年月ごろのことも、おぼつかかりければ」という記述があるが、「よく覚えていない」

と言ってしまうことで、いろいろな出来事のなかにある「はつきりと言いたくないこと」を曖昧に書く、正当な理由づけをしているようだ。筆者が明言しようとしないうこと、覚えていても忘れてしまいたいこと、というのは、おそらく、夫のことで気を揉んだり、期待感を持ってしまったり、というような自分の生々しい心の動きのような類だろう。そうした事柄については「けむ」を用いてばかしてしまっているように見える。そこには、夫の言動に一喜一憂していたような自分をあらためて見つめ、それを一種の嫌悪を以て回顧し——認めたくない、そんな自分と思われたくないという気持ち——、また、諦めと共に突き放した目で客観的に描写する筆者の姿勢がよみとれるように思う。次に類例をあげておく。

1 「これ、見たまはざらむほどに、さし置きて、やがてものしね」と教へたれば、「さしつ」とて帰りたり。もし見たる気色もやと、した待たれけむかし。されど、つれなくて、つごもりころになりぬ。(蜻蛉)

m 「：まだきに来むとあることなむ、びんなかめる。そこにむすめありといふことは、なべて知る人もあらず。人、異様にもこそ聞け」となむのたまふ、と聞くに、あな腹立たし、そのいはむ人を知るはなぞと思ひけむかし。(蜻蛉) 「自分のした行動でもそうと認めたくない」という思いから「けむ」が使われる、という解釈は、他に、伊勢物語にもとら

れている古今和歌集の六四五番歌、

君や来し我や行きけむ思はず  
夢かうつつかねてかさめてか

の場合にもあてはめることができよう。「君や来し」の方は「き」という助動詞がもちいられているのに、なぜ「我や行きけむ」なのか。もちろん、和歌というリズムの制限はあるにしても、この違いはそれだけで説明されることではないだろう。また、三句以下のような状態だったから、自分でもはつきりしなくて「けむ」が用いられた、というのでも、表面的過ぎる解釈に思われる。「思はえず」は、言い訳ではないだろうか？女性が男性のもとを訪れるということできえすでに異例のことである。ましてや斎宮という立場にあるこの歌の作者にとつて、それは朝になつて冷静になれば到底認めがたいことではなかつたか。この気持ち「我や行きけむ」という表現をとらせたのだと考えると、疑問点がうまく説明できる。

これらBタイプは、「過去の不確実な事柄についての表現」としての「けむ」を、表現手段として積極的に取り入れた用例と言えよう。A・Bどちらかという判断は難しいケースもあるが、いづれにしてもその表現が選択されたというレベルにおいては両者とも共通して、なんらかの点で不確実である過去、というものを表しているのである。

そしてさらに、一般には婉曲と説明されている連体形の「けむ」に多い例なのだが、それが事実だとは「信じられない」という話者の気持ちをこめて「けむ」が用いられている、と捉えようとまく解釈できるCタイプがある。「どうしてそんな行動をとつてしまったのか不思議だ」のように、原因や理由が「不確かさ」の対象になっていると考えたほうがよい例も多いが、この場合ももとは事実そのものに対する不審から出たものだ

ろう。断定できないので「けむ」が表現として選ばれるものの、その「不確かさ」は、話者のかなり主観的な疑念に基づいており、その点でAタイプとは異なる。次のn・qのような例が挙げられる。

n 「：やうやう、身の憂さをも、慰めつべき際に、あさましう、もてそこなひたる身を、思ひて行けば、宮を、少しも、『あはれ』と、思ひ聞えけむ心ぞ、いと、怪しからぬ。ただ、『この人の御ゆかりに、さすらへぬるぞ』と、思へば、『小島の色』をためしに、契り給ひしを、などで、『をかし』と、思ひ聞えけむ」と、こよなく、飽きにたる心地す。(源氏・手習)

o 唐土などにも、昔より春秋のさだめは、えしはべらざるを、このかうおほし分かせ給ひけむ御心ども、思ふに、ゆゑはべらむかし。わが心のなびき、そのをりの、あはれともをかしとも思ふことのある時、やがてそのをりの空のけしきも、月も花も、心にそめらるるにこそあべかめれ。春秋をしらせ給ひけむことのふしなむ、いみじう承らまほしき。(更級)

p 「わが子ども七人あれど、かく現世、後生うれしき目見せつるやありつる。かかりける仏を、少しにてもおろかなりけむは、わが身の不幸なる目を見むとてこそありけれ。…」

〔落窪物語〕

q まだ暁より足柄を越ゆ。まいて山の中のおそろしげなること言はむかたなし。雲は足のしたに踏まる。山のなからばかりの、木の下のわづかなるに、葵のただ三筋ばかりある

を、「世ばなれてかかる山中にしも生ひけむよ」と、人々あはれがる。(更級)

Qの例は、婉曲とも、また詠嘆とも説明されることがあるが、次に挙げた『源氏物語』の例と比較してみると、Cタイプのよくなへけむが用いられた場合に感じられる話し手の気持ちと、いわゆる「詠嘆」のへけりが使われている時に読みとれるものとの違いがはっきりするように思われる。

◆人は、思ひよらぬ事なれば、「この月まで、(藤壺が懐妊のことを)奏せさせ給はざりけること」と、驚き聞ゆ。(源氏・若紫)

いずれにしても、へけむやへけりやがダイレクトに「詠嘆」などの意味をあらわす、というわけではなく、結果的にそのようなある含みを読み手に伝えることになるという点は同じだ。しかし、へけりによって表われるのは、ある事実がわかったときの驚き・意外性に対する感嘆である。それに対してへけむは、話者が目の前にしている事実、あるいは確かにそうだと認められているような事柄に対して、なぜだかどうしても信じられない気持ちを抱いてしまって、「ほんとうにそうなのだろうか」「どうしてまたそんなことになったのかしら」と、疑いを投げかけ、特にその背後にある原因・因縁などに思いが至ることになる場合も多い。(このときの「どうして」は、省略されているというのではなく、文脈上疑問を含むと解釈できるから出てくるものである。)へけりのいわゆる詠嘆は、基本的に「気づく」ことから発するものだが、それに対して、このようなへけむは厳然たる事実を事実として受け入れ得ない、言ってみれば

ば逆に「目をそらす」表現であって、単に「詠嘆」として説明してしまえるものではないし、「婉曲」で片付けてしまっては、一番大事な部分を見落としかねない。

### 三、まとめ

今まで問題の焦点を明確にするために、いくつかのタイプに分けて用例を見てきたが、この論考は分類を目的としたものではない。各タイプは明確な境界線で区切られるわけではなく、連続しているし、無理にある一つのタイプにおさめてしまつては解釈が適切でなくなる用例もあるだろう。そのことを踏まえた上で、最後にすべてを総合するかたちでまとめてみたい。

自分の経験したことに對してへけむを用いることが可能であるのは、へけむが本来、ある事柄を「不確かな」として疑念を含んで表現するものである、ということに依っている。自分が直接見聞きしたことであっても、後になってよく覚えていなければ、「これこれだったのだろうか」という表現がとられてもまったく不思議はない。それをもう一歩進めて、自分がしたことでありながら「ほんとうにそんなことをしてしまったのだったかしら」とか「こんなふうにも思ったのだったろうか」というように、それを認めたくない気持ちをへけむによって積極的にあらわすことも可能性だと考えられる。つまり、誰が見ても不確かである必要はなくて、表現主体が不確かだと思っていれば、そこにへけむが用いられる必然性は十分存在しているのだ。「不確かに感じる」という程度から、「不確かだと思いたい」、また「不確かだと思つてほしい」というようにその幅が

広がって行くことも自然なのである。また、この「疑念」、うたがいの気持ちは、事実の存在自体が不思議であるとか、つきつめて考えると原因・理由が不思議、というような、「信じられない」気持ちともつながっていく。

このような「へけむ」によって提示されるのは、過去に話者自身の身の上起こった事実に対する、わからない部分や不審な点に対する関心であって、それが結果的に嘆きや驚きとなる場合もあるだろう。

ある事柄を言葉で表現する場合、そこにはいくつかの層が存在している。いちばん下には、事実そのもののレベル、その上にそれを認識するときのレベル、そしてさらに言葉にして表すときのレベルである。言語表現というのは、最終的にこのような多層性の中の一番上のレベルの問題として考えるべきだと思われる。つまり、客観的な事実のレベルで不明確なことは、もちろん「へけむ」で表現され得るし、また、事実認識のレベルで不明確であるため「へけむ」が用いられることもある（これは主観的になる）。そしてさらに、IIIのタイプB・Cのように、表現のレベルで話者が意図的に「へけむ」を用いることも可能であり、それはなんら不思議なことではない。逆に言えば、自分としてはあまりはつきりわかっていることを断定的に言うこともまたあることであるし、誰にもわからないはずの未来について自信ありげに断言する人もいるように、ことばとしてあらわす、というのは常に事実とは全く別の次元で、表現主体のごく主観的な判断にもとづいておこなわれるものである。

結局、事実のレベルではなく、言語表現のレベルにおいて、

話者が「へけむ」を用いるのは、それがなんらかの点で不確実な事柄であると捉えているか、あるいは受け手にそう理解してほしいという態度の表明と捉えればよい。

このように考えてみれば、「へけむ」の「意味」の中心が「過去の不確実な事柄の推量」ならば、こうしたタイプB・Cのような用法も、「へけむ」の中心的な用法から外れるような特殊なものではなく、結果的にいろいろな話者の気持ちを含みとして読みとることができるとしても、中途半端で誤解を招きやすい「詠嘆」や「婉曲」などのレッテルをあらたにつける必要はないという結論に達する。

〔参考文献〕

- 松尾捨治郎「助動詞の研究」(昭和一八年)  
小林芳規「連用形に続く助動詞・けん」『国文学 解釈と鑑賞』(昭和三二年・十一月)  
三浦和雄「「へけむ」の研究」(「いわゆる推量の助動詞」二)『国文学 解釈と教材の研究』四一二(昭和三四年・一月)  
堀田要治「へけむ(けん)―推量・古典語」『古典語・現代語 助詞助動詞 詳説(松村明編)』(昭和四四年)  
阪倉篤義「へべし」へらし」へらむ」へけむ」について」『佐伯梅友博士古希記念国語学論集』(昭和四四年・六月)  
根来司「へむよ」へらむよ」へけむよ」―平安女流文学における―」『藤女子大学国文学雑誌』五一六(昭和四四年・七月)  
根来司「「へけむ」と「けり」の関係」『月刊文法』二二八(昭和四五年・六月)  
岩淵匡「へけむ」へらむ」の意味―いわゆる原因推量に関して―」『月刊文法』二一八(昭和四五年・六月)  
此島正年「国語助動詞の研究」(昭和四八年)

吉田金彦「上代語助動詞の史的研究」(昭和四八年)

塚原鉄雄「推量の助動詞―その国語史的考察―」『論集日本語研究7』(昭和五四年)

北原保雄「日本語助動詞の研究」(昭和五六年)

山口佳紀「古代日本語文法の成立の研究」(昭和五六年)

山口明穂「平安時代の言葉と思考」『国語と国文学』六八―七十一(平成三年・十一月)